

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19720071  
 研究課題名（和文） 19世紀末ジャーナリズムにおけるテロリズム表象と初期モダニズム小説における影響  
 研究課題名（英文） The Representation of Terrorism in Late Nineteenth-Century Journalism and Its Influence on Early-Modernist Novels  
 研究代表者  
 伊藤 正範（ITO MASANORI）  
 関西学院大学・商学部・准教授  
 研究者番号：10322976

研究成果の概要（和文）：19世紀末イギリスにおけるニュー・ジャーナリズムの台頭に伴う小説のメディアとしての機能の変遷を、両者におけるテロリズム表象に注目することによって探った。中心的に取り上げたジョーゼフ・コンラッドの小説においては、初期モダニズムのテキストがジャーナリズム的言語を内部に取り込むことで伝統的なフィクションの語りを放逐しつつも、同時にジャーナリズム的言語を変形させることで、欠落したヒューマニズムを補完していることを見出した。

研究成果の概要（英文）：This project, by focusing on the representation of terrorism, investigated how the function of novels as media shifted in England in the late nineteenth century when the New Journalism started to prevail. It was discovered, chiefly through the examination of Joseph Conrad's works, that early modernist texts on the one hand dismiss the traditional language of fiction by internalizing the language of journalism, while on the other compensate the incidental loss of humanity through the transformation of journalistic language.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	390,000	2,890,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ジャーナリズム、テロリズム、初期モダニズム、ジョーゼフ・コンラッド、H. G. ウェルズ

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末のイギリスでは、中産階級の目覚ましい躍進や労働者階級に対する学校教育の普及、また印刷技術の向上と比例して、新聞の発行部数が飛躍的に増大した。特に1860年代から80年代にかけて台頭したニュー・ジャーナリズムと呼ばれる動向において、新聞は、イラストレーションや扇情的・ゴシップ的なスタイルを多用することで大衆の人気を獲得していった。他方で、同時期の小説には、一例としてJoseph Conradの作品に顕著に観察されるような、形式面における大きな変革が訪れつつあった。いわゆる初期モダニズムとして分類され、1920年代のハイ・モダニズム期へとつながる先駆的徴候とみなされている動向である。

本研究の開始段階において、Conradの小説とジャーナリズムとの関連に注目した研究は数が少なく、Matthew Rubery, "Joseph Conrad's 'Wild Story of a Journalist,'" *ELH* 71 (2004): 751-74 などにおいて、Conrad作品における反ジャーナリズム的姿勢が指摘されているものの、初期モダニズムとしての芸術的特性を視野に入れた研究はほとんどなされていない状況であった。そうした意味で本研究は未開拓の研究領域に踏み込む試みであったが、同時に先行研究の乏しさから生じる議論不足を補完するために、テロリズムというもう一つの着眼点を用意した。Barbara Arnett Melchiori, *Terrorism in the Late Victorian Novel* (1985) において指摘されているように、フェニアン運動やアナキズムなどの政治的運動の活発化とともに流行したテロリズムは、19世紀後半の小説と密接な関係を有していたが、同時に、当時のジャーナリズムを考察する上でもまた見落とすことのできない要素である。テロリズムの多発が、扇情的トピックスを好むニュー・ジャーナリズムの発展に大きく寄与したからである。またジャーナリズムとテロリズムの結びつきは、決して19世紀末に限定された問題ではない。1980年代以降、特に9.11テロを経て、ジャーナリズムがテロリズムの脅威の増大に寄与し、その無自覚的な「共謀者」となる傾向が指摘されてきた (Grant Wardlaw, *Political Terrorism* (1982)、および Pippa Norris, Montague Kern, and Marion Just, ed., *Framing Terrorism* (2003) 参照)。本研究は、そうしたテロリズムとジャーナリズムに関する現代的認識も視野に収めて着想されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、初期モダニズム文学と当時のジャーナリズムにおけるテロリズム表象に注目することによって、前者の芸術的側面の形成における後者の影響を調査することであった。この研究には、ジャンルの勃興期において、ジャーナリズムと機能的に未分化であった小説の特質が大きく関連してくる。Daniel Defoeの*A Journal of the Plague Year* (1772) において顕著なように、小説とは元来、ジャーナリズムと高い親和性を有する媒体であった。そうした状況に大きな変化が訪れたのが、19世紀後半から20世紀前半にかけての初期モダニズムとして分類される時期である。この時期のフィクションは、旧来的な語りの信頼性や語りにおける時間的秩序などを次々と否定しながら、ジャーナリズムの簡潔かつ直裁な言語とはまったく異なる独自の言語を生み出していった。

本研究は、こうした小説の芸術面における変遷において、同時期に急成長を遂げたジャーナリズムが重要な影響を及ぼしているのではないかという仮説を打ち立てた。具体的には、初期モダニズム小説の独特な言語を、ニュー・ジャーナリズムの隆盛に直面する小説テキストが自らの存続を模索する中で (ジャーナリズムの言語との差異化を図る中で) 生み出していったものとみなす考え方である。ジャーナリズムが、その最新の情報提示能力を介して (「絵入り新聞」におけるイラストの多用もその一例である)、本来人々の目には「見えない」はずのテロリズムを可視化することに大きな力を注いだのに対し、初期モダニズム小説は、その独特の言語を通して、テロ事件の背後にある「見えない」もの、すなわち人間性にまつわる種々の主題を提示しようとしていた可能性が高い。例えば、Conradの*The Secret Agent* (1907) では、新聞記事の引用を通してグリニッジ天文台爆破事件が伝えられる場面があるが、そこからは爆死したStevieの人間性や、姉Winnieの彼に対する愛情の深さが完全に欠落している。初期モダニズムの語りとは、こうしたジャーナリズムの非人間的言語に対するアンチテーゼであるというのが、当初設定された仮説であった。また、ジャーナリズムの言語が、その可視化への欲動ゆえにテロリズムの脅威を強化・再生産するにすぎなかった (無自覚的共謀者となっていた) のに対し、初期モダニズム小説の言語はむしろ不可視のものを積極的に前景化することによって、テロリズムの背後にある人間的主題を伝達する、より高度な力を手に入れようとしてい

たとも考えられた。これらの推定の立証を通して、初期モダニズムの芸術的側面の本質へと迫っていくことが、本研究が最終的に目指したものである。

### 3. 研究の方法

(1) 研究初年度においては、主に 19 世紀後半の新聞・雑誌におけるテロリズム表象について検証した。この研究においては多岐にわたる一次資料の収集・解析が不可欠であるが、国内に所蔵されている資料が乏しいため、イギリス大英図書館を中心に調査活動を行った。具体的には 1880 年代から 1890 年代にかけてニュー・ジャーナリズム運動の中心的位置を占めた *Pall Mall Gazette*, *Daily Telegraph*, *Daily Mail*, *Daily Mirror*, *Star* などの日刊、夕刊、日曜紙、また、*Illustrated Times*, *Illustrated London News* などの絵入り新聞における、テロ事件の発生やその捜査経過を扱った記事を調査収集した。また、それらの資料解析に際しての理論的枠組を補強するために、ジャーナリズムおよびテロリズムに関連する二次資料も併せて収集調査した。

(2) 研究二年目の平成 20 年度においては、初年度から継続して一次資料の収集調査に当たると同時に、それらの調査結果を小説テキストの分析に援用する作業に着手した。この際、自らを「ジャーナリスト」と称し、当時の芸術至上主義運動から距離を置いていた H. G. Wells の *The Invisible Man* にテロリズム表象を見いだせることに着目し、小説テキストにおけるニュー・ジャーナリズム運動の影響を検証した。併せて、同年に出版された Joseph Conrad の *The Nigger of the "Narcissus"* にも同種のテロリズム表象を見いだせることに注目し、両作家のジャーナリズムと芸術性に対する姿勢の相違が、テキストにおいてどのように表れているかを比較分析した（成果は論文『見えない』テロリスト、『見える』テロリスト——*The Invisible Man* と *The Nigger of the "Narcissus"* における退化者の可視性」として翌年度に発表）。

(3) 研究最終年の平成 21 年度は、一昨年度、昨年度にわたって収集したジャーナリズム関連の一次資料の調査結果をもとに、昨年度に引き続き小説テキストの分析・理論化を実施し、結果公表のための論文執筆を行った。具体的には Conrad, *The Secret Agent* のグリニッジ天文台爆破テロの表象におけるジャーナリズムの言語と伝統的な小説の言語との関わり合いに注目し、独自の初期モダニズム理論の構築を試みた（結果は  
“Newspapers in Pockets: Journalism and

the Language of Fiction in *The Secret Agent*”として発表)。加えて、19 世紀末ジャーナリズムや Bram Stoker, *Dracula* などの文学テキストにおけるテロリスト表象と外国人嫌悪症の結びつきに注目し、その影響を Conrad の小説作品における外国人描写や、自伝におけるポーランド人としての自己描写に見出す試みを行った（論文「ドラキュラとコンラッド—19 世紀末イギリスにおけるゼノフォビアと東欧人の自伝的語りについて」として発表）。

### 4. 研究成果

(1) ともに 1897 年に出版された Wells, *The Invisible Man* と Conrad, *The Nigger of the "Narcissus"* におけるテロリズム表象の比較研究を通して、ニュー・ジャーナリズムの全盛期における小説言語の自己構築を複眼的に解明した。Wells などのいわゆる「リアリズム」作家と Conrad に代表される「モダニズム」作家の比較を通して、初期モダニズムの本質を見出そうとする試みである。分析を通して見えてくるのは、両者の近接性に焦点を当てる近年の議論では扱いきれない、初期モダニズムの語りの多様性・複雑性である。

一見テロリズムとは乖離したプロットによって構成される *The Invisible Man* であるが、当時のジャーナリズムの分析を行うと、内包される多くの要素が、新聞・雑誌において頻出したテロリズムの描写と重なり合うことが見えてくる。特に、当時の爆弾製造者 Mezzerooff とよく似た姿を呈する Griffin は、物語の後半、「恐怖による支配」を宣言し、見せしめの殺人を通してイギリス全土を震撼させながら、文字通りテロリストそのものとなっていく。そして、科学者 Kemp の広報活動を通して追い詰められ、最終的に労働者によって撲殺された Griffin が群衆の眼前でその姿を現していく様子は、当時のジャーナリズムの言語が、社会の闇にうごめく「見えない」犯罪を大衆に向けて可視化したプロセスに酷似している。

それに対して、*The Nigger of the "Narcissus"* における「テロリスト」Donkin は、暴君のように船中で君臨する黒人船員 Wait の退化を「探るような注意深い視線」をもって見抜くことで、自らの生きる道を切り開いていく。この点において Conrad のテキストは Wells のそれと決定的な相違を抱え込む。士官たちに船具を投げつけながら船員を暴動寸前まで駆り立て、さらには衰弱した Wait から冷酷に金を盗み去る Donkin は、しかし、Griffin のように犯罪者として可視化されるのではなく、自身が「見る」力を身につけることによって、巧みに現実社会の隙間をすり抜けていく。Wells が Griffin を可視化することによってその邪悪な力を調伏し

たとすれば、Conrad は逆に Donkin に可視化の力を与えた後、あたかも街路に爆弾を投げ入れるように、彼をロンドンに解き放つのである。

こうした相違を通して見えてくるのは、ジャーナリズムの安定した言語に近接した Wells の語りと、その安定性にあえて石を投じる Conrad の語りである。これは、言い換えれば、リアリストとモダニストという両作家の従来の分類にそのまま当てはまる特徴であり、両者の芸術的姿勢における明確なずれを指し示すものである。しかしそのように分岐したかに見えるテキストは、意外にも最終地点で合一する。Griffin の研究成果が暗号で記載されたノートを毎夜眺める Marvel は、「他人の目には見えないもの」に向かって目をしばたかかせながら「秘密がいっぱいだ」とひとりつぶやく。文盲のために新聞すら読めない浮浪者 Marvel がもとより暗号など解読できるはずはない。ノートの行方を必死で捜査する警察の思惑とは裏腹に、「見えない」記号は、最後の最後においてテキストに残留するのである。こうした分析からは、可視化という命題をどのように扱うかによって、作家が自らの社会的姿勢を語り積極的に織り込むことができた一方で、語りそのものの安定性にもはや究極的な抛り所を求めることのできなくなった初期モダニズムのテキストの複雑さが浮かび上がってくる。こうした分析を通して初期モダニズムの語りの再定義を試みたのが、論文「見えない」テロリスト、「見える」テロリスト—*The Invisible Man* と *The Nigger of the "Narcissus"* における退化者の可視性」である。

(2) Bram Stoker, *Dracula* および 19 世紀末ジャーナリズムにおける、病やテロリスト、あるいは英語学習者としてのテロリスト表象と外国人嫌悪症の結びつきに注目し、その影響を Conrad の小説作品における外国人描写や、自伝におけるポーランド人としての自己描写に見出した。これまで Conrad のポーランド出自とその作品主題の形成との関連を見出す試みは多くなされてきたものの、当時の外国人嫌悪症が Conrad の語りの形成に及ぼした影響については未だ十分な検証がなされていない。その意味においてこれは未開拓の領域に踏み込む研究主題である。

具体的には、*The Nigger of the "Narcissus"* における外国人船員たちの描写や、*The Secret Agent* における外国人アナキストたちとロシア大使館の Vladimir の描写に注目し、それらが作者である Conrad 自身をも巻き込みかねないさまざまなゼノフォビアの徴候に彩られていることを確認した。その上で、Conrad の自伝における自己

表象に目を向けてみると、ゼノフォビアへの近接性が認められる箇所において、偶然性や運命、そして文学や言語との生得的な結びつきを強調するナラティブが出現し、Conrad とイギリスの結合を補強している現象が見出された。成果は論文「ドラキュラとコンラッド—19 世紀末イギリスにおけるゼノフォビアと東欧人の自伝的語りについて」として発表した。

(3) Conrad, *The Secret Agent* における人間性を媒介する声の不在と、新聞記事の多用とに着目し、伝統的な小説の語りとジャーナリズムとの相関関係についての議論構築を行った。研究開始当初は、席卷するジャーナリズムの言語を差別化するために、小説が独自の言語を創出していく可能性を探ろうと試みていたが、さまざまな一次資料の分析に加え、テキストの精査を重ねたところ、小説の語りやむしろジャーナリズムの言語を内部に取り込み、変形させることで、欠落した人間的な声を補完している可能性に行き当たった。これは本研究課題全体を通しての最大の成果であり、初期モダニズムの発生についての従来の議論に新たな光を投じるものである。

具体的に議論の出発点となったのは、Conrad が *The Nigger of the "Narcissus"* の序文で展開したような純粋芸術論と、書簡やエッセイなどにおけるジャーナリズム批判とを安易に結びつける風潮への批判である。実際、作中の中心的プロットであるグリニッジ天文台爆破事件を精査してみると、コンラッドは、知的障害を抱えたスティーヴィーによって供給される社会的弱者への共感的な視点をあえて廃し、代わりにジャーナリズム的な言語の席卷を許していることがわかった。結果として、ヒューマニティを媒介する視点を欠いたまま物語は進行し、テキストは言語芸術の勝利というよりはむしろ敗北を体現することになる。しかし他方で、テキストは、失われたフィクションの言語を取り戻すべく、意外な代替物に依拠し始める。それが、登場人物の Ossipon や Heat によってポケットから取り出される新聞である。畳まれたり破れたりしたそれらの新聞からは、途中で途切れ、不自然に繰り返される断片的な語句しか得られない。しかしそれこそが、これまで人生のうわべしか眺めてこなかった Winnie をして人生の深淵をのぞき込ませ、女性を金づるにして安易な人生を歩んできた Ossipon の心の基底部に深刻なダメージを与える媒体となるのである。

上記の議論を展開した論文“Newspapers in Pockets: Journalism and the Language of Fiction in *The Secret Agent*”では、初期モダニズム文学が大衆的ジャーナリズムと

の間に単純な二項対立を形成するのではなく、むしろその言語を自らの内に取り込むことによって、フィクションの言語の新たな可能性を模索していることを立証した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 伊藤正範、「見えない」テロリスト、「見える」テロリスト—*The Invisible Man*と*The Nigger of the “Narcissus”*における退化者の可視性、コンラッド研究、査読有、1巻、2009、1-26

② 伊藤正範、ドラキュラとコンラッド—19世紀末イギリスにおけるゼノフォビアと東欧人の自伝的語りについて、商学論究、査読無、57巻、2009、201-222

③ Masanori Ito, *Newspapers in Pockets: Journalism and the Language of Fiction in The Secret Agent*、*Studies in English Literature*、査読有、Vol.51、2010、1-19

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

伊藤 正範 (ITO MASANORI)  
関西学院大学・商学部・准教授  
研究者番号：10322976

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし